

日本福祉大学

→ NIHON FUKUSHI UNIVERSITY

「ふくし」の総合大学として 「ふだんのくらしのしあわせ」に 貢献する幅広い人材を育成

福祉系総合大学として特色ある教育を展開する愛知県の日本福祉大学。高齢化社会の進展などに伴い、「福祉」というキーワードのもつ意味が大きく変わりつつある今、同大学はどのような人材を育成し、どのようなかたちで社会に貢献しようとしているのだろうか。社会福祉学部の教授陣にその教育のねらいを聞いた。

取材・文／伊藤敬太郎 撮影／天野貞勇



2015年4月には 看護学部を新設予定

日本福祉大学は図1に示した6学部8学科を擁する福祉の総合大学だ。愛知県知多半島に位置する美浜キャンパスには社会福祉学部と子ども発達学部が、同じく知多半島の半田キャンパスには健康科学部があり、それぞれ地域に密着した福祉教育を行っている。

さらに、2015年4月には、名古屋市の隣の東海市に東海キャンパスを新設。同キャンパスには、同じく2015年4月開設予定の看護学部（設置構想中）のほか、現在、美浜キャンパスにある経済学部と国際福祉開発学部が入る予定だ。

同大学が、現在、コンセプトとして掲げているのが、「ふだんのくらしのしあわせ」を略したひらがなの「ふくし」。では、「『ふくし』の総合大学」である日本福祉大学の教育の特色はどこにあるのだろうか？

社会福祉学部も経済学部もある総合大学は決して珍しくない。しかし、その場合、経済学部は経済学部、社会福祉学部は社会福祉学部でそれぞれ別系統の教育が行われるのが一般的だ。

それに対して日本福祉大学では、社会福祉学部や子ども発達学部はもちろん、経済学部も含めてすべての学部で、「ふくし」の観点から教育に取り組んでいる。例えば、「一人でも多くの人が幸せに暮らせる仕組みを築く」という切り口で考えれば経済学も「ふくし」。そのため、同大学の経済学部には福祉系科目が多数そろっているほか、社会福祉学部と共

同で行う「地域研究プロジェクト」というPBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング）科目なども設けられている。

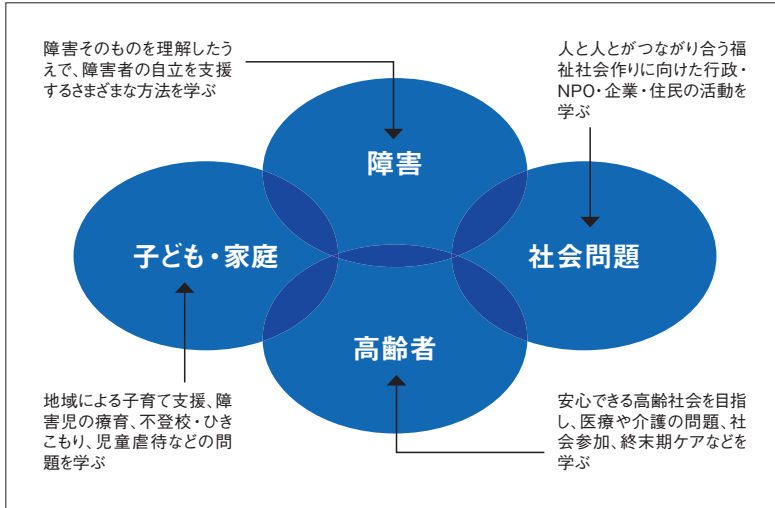
設置構想中の看護学部も考え方は同様。看護の専門力に「ふくし」の考え方を備えた人材を育成し、保健・医療・福祉の分野に送り出すことが目的だ。

経済・経営+ふくし、地域貢献+ふくし、国際開発+ふくし、保育・教育+ふくし、看

図1 日本福祉大学のキャンパスと学部



図2 社会福祉学部の対象領域



護+ふくし…… etc. 日本福祉大学が「『ふくし』の総合大学」を旗印とし、このように多角的な福祉人材育成に力を入れる背景を、社会福祉学部の原田正樹教授は次のように解説する。

右肩上がりの社会から みんなで分かち合う社会へ

「一般的には、福祉というと、高齢者や障害者などの社会的弱者を救済すること、彼らの最低限度の生活を保障することという認識がありますね。しかし、今は福祉の考え方も変わりつつある。『ふくし』の主人公は“はく”であり“わたし”。自分の幸せを考えながら、家族や友達、地域、社会へと視野を広げていく。そのなかで、



社会福祉学部 学部長 児玉善郎教授

博士(工学：神戸大学)。研究分野は福祉住環境、高齢者住宅問題、災害福祉など。東日本震災における被災者支援、復興支援に関する研究にも取り組む。

それぞれの幸福を追求していくことが、ひらがなの『ふくし』なのです」

この「ふくし」へのシフトは、避けようがない社会的な変化に対応したのもでもある。社会福祉学部 学部長の児玉善郎教授はこのように語る。

「すでに人口の減少が始まり、高齢化が一層進行していくこれからの社会は、今までのような右肩上がりの社会とは価値観が大きく変わってきます。今あるものをみんなが少しずつ分け合っていくという考え方をしていけないと社会が成り立ってゆきません。これまでは、福祉は社会の一部をカバーするものでしたが、これからは社会の全体をカバーしていく必要があるのです。ふくし的な観点から問題を取りまとめ、問題解決を図っていく専門能力のある人材があらゆる場面で求められていくことになります」

“他人事の福祉”から“私事(わたくしごと)のふくし”へと視点がかわることで、対象となる領域は一気に広がる。生活に困窮している人々への援助はもちろん変わらずに重要だが、「誰もが幸せに暮らせる社会の追求」がテーマだから、子ども、若者から高齢者に至る社会的孤立の解消、地域の災害対策、産業振興による地域力の強化などの課題すべてが「ふくし」の対象になるのだ。

このような幅広いテーマ設定は学部のコース内容にも反映されている。

社会福祉士、精神保健福祉士などの

専門職を育成する社会福祉学部では、福祉の現場における相談援助の実践力を磨く「福祉実践コース」、医療分野での活躍を想定した「医療福祉コース」、地域社会での活動を念頭に置いた「地域福祉コース」、新しい社会福祉の枠組みを構想できる人材を育てる「福祉社会コース」の4コースを設置。一つの学部のなかでも、多様な専門性をもった人材の育成に取り組んでいる。

児玉教授は、この社会福祉士の働き方、社会的ニーズの広がりについて次のように解説する。

「社会福祉士を取得後の進路としては福祉施設などで働くソーシャルワーカーがあります。直接高齢者の介護などを行うのではなく、社会生活上のさまざまな問題を抱えた人たちの相談援助に当たる仕事です。ソーシャルワーカーの活躍の場は広がっており、医療ソーシャルワーカーとして病院で経済的な問題を抱えた患者さんをサポートしたり、スクールソーシャルワーカーとして児童虐待などの相談援助に取り組んだり、公的機関やNPOに所属して生活保護世帯の相談に乗ったりするケースも増えています。子どもから成人、高齢者まで、対象となる層は非常に幅広いですね」

民間企業などで活躍する 社会福祉士も増えている

その一方で、ソーシャルワーカー以外の活躍の場も広がっているという。

「社会福祉士として習得した対人援助スキルを生かして、民間企業で活躍する卒業生も多いですね。高齢化が進展するなかで、企業のビジネスの対象も高齢者へとシフトしてきている。また、有料老人ホームや福祉用具のレンタル・販売など福祉事業を展開する企業も増えてきています。そういったなかで、高齢者がどんな生活をし、どんなことを感じているかについての基本的知識があり、かつ相手に寄り添ってくみ取ることができる社会福祉士へのニーズは高まっているといえます」(児玉教授)

もちろん、単に資格を取得するだけで、多様な分野で通用する力が身につくわけではない。次に、実践を重視した日本福祉大学の教育の特色をみていこう。

同学部が人材育成において重視しているのは以下の3つの能力だ。

- ①シチズンシップ(市民性)
- ②コミュニケーション能力
- ③問題解決能力

この3つを総合して「自己形成力」と定義。そして、これらの能力を開発するために採り入れているのが2年次のサービ斯拉ーニングだ。

「地域のNPOの協力を得て、夏祭りなどの地域のイベント、子どもたちや高齢者の生活支援活動などに主体的に参加します。ポイントは2つあります。一つは自分たちで企画を考えること、もう一つは活動先で貢献活動をすることです。ですから、前期は自分たちに何ができるかをじっくり考え、活動に参加。後期はそのリフレクションをじっくりとやり、単なる活動報告ではなく、活動で得られたものを分析して研究発表を行います。この一連の過程

が、その後、3年次に行われる社会福祉実習や『地域研究プロジェクト』において、“現場で学ぶ力”を養っていくのです」(原田教授)

正規のカリキュラム以外のサークル活動なども活発

サービ斯拉ーニングの現場では、最初は挨拶もきちんとできなかった学生が、NPOスタッフに叱られたり褒められたりしながら企画を実現し、大きく成長した例も多いという。

地域研究プロジェクトは地域貢献をテーマとした社会福祉学部・経済学部共同のPBL。「まちづくり」や「認知症理解の促進」などをテーマに、3～5年単位の常設型から短期で完結するものまで複数のプロジェクトがあり、学生は自らの希望するプロジェクトに参加して、社会に貢献することの喜びと意義を感じながら自己形成力を磨いていく。

また、正規のカリキュラム以外でも学生の活動は活発。日本福祉大学には伝統的に多数のボランティアサークルがあり、社会福祉学部のほとんどの学生は何ら



社会福祉学部 原田正樹教授

博士(社会福祉学:日本福祉大学)。研究分野は地域福祉、福祉教育。全国各地の自治体や社会福祉協議会の計画策定やボランティア活動にかかわる。

かのサークルやNPOに参加しているという。自分たちで新たにサークルやNPOを立ち上げるケースもある。

講義に加え、このように現場で学び、感じる機会を通して、学生は福祉の専門性ととも、主体性やバイタリティを高めていく。そして、卒業後は、社会のさまざまなセクションで活躍する福祉マインドをもったリーダーへ——。「ふくし」の時代を担う人材を育てる教育が、ここ日本福祉大学では行われている。

学生インタビュー

仕事ってすべて福祉なんだと感じています

——社会福祉学部に進学した理由は？

教員志望だったのですが、進路について調べている過程で教育+福祉という立場から子どもたちを支援する道もあると考えて選びました。現場で豊富な経験をもつ先生や魅力的な先輩がたくさんいたことも理由でした。

——福祉を学んでみて感じたことは？

福祉というのは高齢者や障害者に限らず、健常者も含めて誰もが関係することなんだと知りました。例えば、若者の就労支援や防災・減災などもそうです。社会にできた穴や溝を埋めるのが福祉。今では、仕事ってすべて福祉なんじゃないかなと思っています。また、社会学、経営学、心理学などいろんな要素が詰まった学問なんだとも感じました。

——課外活動について教えてください。

中学生の勉強をサポートする団体に参加しています。家庭環境などが要因で勉強する十分な機会が得られない子どもたちは地域にたくさんいるので、なんとかしたい。本当は勉強以上に居場所支援という意味も強いです。誰かと一緒にいることって大事ですから。現場で学ぶことは本当に多いですね。大学で学んだ理論の意味を現場で知ること、その逆もありますね。

——今後の目標は何ですか？

今の活動も法人格を得て継続的なものにしていきたいですね。また、卒業後は、児童福祉施設など何らかのかたちで子どもたちにかかわっていく仕事をしたいです。



社会福祉学部3年 田中嵩久さん

三重県高校出身。社会福祉学科福祉社会コースに在籍。学習支援団体「アンビシャス・ネットワーク」の活動にも携わっている。